

【先月号で取り上げたばかりの記事が一】 [迫り来る法改正と時代変化の荒波-57]

<[SMGレポート 3011 序文> 去る11月11日、パリで開催された「第一次世界大戦終結100周年=1918年11月11日終戦」を祝う式典で、現代フランスの若きリーダー「マクロン(39)」は、大要次のような演説を行ないました。

『自国利益が最優先で他国の事など気にしない』と言う古い悪魔=世界大戦を招いた一国主義=が、今再び甦ろうとしている。その復活は、大戦による多くの犠牲とそこから得た苦い教訓から、我々が築き上げてきた宥和の精神や倫理的価値観、相互扶助や民主主義の精神を踏みにじるに等しく、国際社会から身を引き、暴力や一極支配等に魅了されてこの希望を踏みにじるのは、間違いだ。…だから皆ともに、平和の為に戦おうではないか』と、正にその**一国主義の権化**であり、当事者そのものに他ならない**トランプやプーチン**等が居並ぶ前で、全く臆する事なく真正面から、揶揄や皮肉に逃げる事なく堂々と切り込み、**強く警告を発した**のです。さすが「自由・平等・博愛=フラテルニテ」を建国の精神とするお国柄=国民性=だけあって、**権威や権力、プレッシャー等ものもせず、絶対に屈しない、後には引かないぞ**という強い意思が滲み出た名言だと感じました。内向きには、威勢の良い言動を繰り返しながら、いざとなると大国の顔色を窺い、揉み手外交に終始するどこやらの国とはモノが違う、否、デキが違うという他ありません。隣接する国々と剣を交え、侵略し或いは侵略される歴史を生き抜いてきた欧州の国の強さを、マザマザと見せつけられた思いでした。そんな折も折、この16日に、カンボジアで大量虐殺(キリングフィールド=虐殺の荒野)に絡んだ当時=1975~1979=のクメール・ルージュ(急進的毛沢東主義者)の指導者二名に、有罪判決が下ったというニュースが入ってきました。実は、これらは**二件とも、先月号のレポート(「賢者が学ぶ歴史とは一」)**で何気なく紹介したばかりのものです。特に時世を先読みした訳でもなく、当然その意図も持ち合わせて居りませんので、結果的にタイムリーただただと云われれば、確かにその通りなのですが、偶然にしてもまさかこの様な展開になろうとは、小職自身、只々驚いている一というのが正直な処です。

さて、前号からの流れを引き継いで一という訳ではありませんが、視点を少し南東に移してみようと思います。その先には、これはこれで**超近代の装いをこらした「先祖返り」**の様な光景が出現しつつあります。恐らく、初めて耳にする方が大半ではないかと思いますが、「**デジタルレーニン主義**」と云われるものです。一体何の事でしょうか?一党独裁の当局がネットを統制し、取締り、事業者を規制し、処罰を下し、全国民の信用情報を自ら提供させ一括管理(既にご紹介した**芝麻管理**等)する**中国の習体制**=一面では、**Cashless 化の進んだ超IT社会**=を指しています。人手不足が深刻化しつつある日本でも、これを見習おうとする動きもある様ですので、問題点を探って見たいと思います。